

職員リレーエッセイ

『吾輩は猫である』

ニコニコデイサービス鶴里 介護職員 青砥孝子

吾輩は猫である。そして名前も「ねこ」である。

今年27才になった青砥(あおと)家次男坊に、5才の時に公園で拾われた。この子がまあ「ねこちゃ〜ん、ねこちゃ〜ん」って呼ぶものだから、そのまま名前は「ねこ」。動物病院の診察券も「青砥ねこ」。そして2年前の1月3日に死んじゃうまで、約20年間青砥家を見守りました。

次男坊が9才の時に、喘息の大発作を起こし入院。検査の結果1番のアレルゲンは、まさしく私の毛。ハウスダストでも犬の毛でもなく、私の毛。ヤバイ…退院してきたら捨てられるかも…って、部屋の隅で小さく丸まっていたけど、そんな事は無く、私は「次男坊の部屋に入らない」「しばらく次男坊から頭をなでなでされない」という刑で収まった。

それから1年後私にとっては天敵の三男坊が産まれた。私より後に青砥家に来たくせに、歩くようになると尻尾(しっぽ)は踏む(絶対わざと!)、そして引っ張る。逃げる私を追いかける。…いい運動にはなったが…。その2年後、長男坊に娘が生まれ猫アレルギーが判明し、その子が遊びに来ている間だけ、ゲージに入る事になった。ゲージに入る事によって、まだ2才だった三男坊からは守られるので「喜んで!!」入った。



それから子供たちも大きくなった分私も年をとって、15年を過ぎた頃から人間でいう認知症なのか、夜鳴きをしてしまった。

夜中に「にゃ〜にゃ〜」と可愛い声ではなく、「ぎゃお〜ん、ぎゃお〜ん」と鳴いてしまう。なぜかは分からなかった。きっと家族みんな寝不足だったと思う。足腰も弱くなって、トイレではない所にしてしまう。17年を過ぎた頃には、肝臓も悪くなった。最後5日くらいは食欲もなく、寝てばかりいた私を、家族みんながなでに来た。

最後の日。2年前の1月3日。明日から三男坊以外全員が仕事始めだ。

みんながいない間に、独りぼっちで死ぬのは淋しいな…。最後の力を振り絞ってヨロヨロとトイレシートまで歩いて、ちゃんと失敗せずに用を足した。家族みんな、頭をなでてくれて「ありがとね」と言ってくれた。私もみんなにお礼を言ったつもりだったが、3回「はー」「はー」「はー」と深呼吸のような感じにしかならず、3回目を吐き切った時、目を閉じた。

捨てられ猫から20年も生きて大往生。自分なりにあつぱれな死に際を、見せられたと思っている。4月から三男坊は高校3年生、長男坊の娘は中学3年生。空からもう少しだけ青砥家を見ていたい。

次は、相談支援センターなごみの熊谷さんにつなぎます。